

令和4年度 第1回大磯町総合教育会議 議事録

1. 日 時 令和4年7月14日(木)
開会時間 午前10時00分
閉会時間 午前11時30分
2. 場 所 大磯町役場 4階第1会議室
3. 構成員 中 崎 久 雄 町長
熊 澤 久 教育長
濱 谷 海 八 教育長職務代理
曾 田 成 則 教育委員
トーリー 二 葉 教育委員
末 續 慎 吾 教育委員(欠席)
4. 事務局 齋 藤 永 悟 政策総務部参事(統括秘書兼政策・デジタル化推進担当)
小 林 英 文 政策総務部政策課長
秋 本 篤 史 政策総務部政策課副課長兼政策係長
山 口 竣 矢 政策総務部政策課主事
大 槻 直 行 教育部長
波多野 昭 雄 教育部学校教育課長
辻 丸 聖 順 教育部学校教育課主幹(コミュニティ・スクール推進担当)
須 田 幸 年 教育部学校教育課主幹(デジタル教育推進担当)
添 田 健 教育部学校教育課主幹(人事担当)
5. 傍聴人 6人
6. 議 題
 - (1) 報告事項 令和3年度第2回総合教育会議における協議内容の報告
「教員の働き方改革について～教育のデジタル化に対応するには～」
 - (2) 協議事項 「大磯町で『学び』・『育つ』子どもたちのために」

7. 会議概要

【開会】

政策課長) ただ今から、令和4年度第1回大磯町総合教育会議を始めさせていただきます。

本日の司会を務めさせていただきます、政策総務部政策課の小林です。よろしくお願いいたします。

本日は末續教育委員から欠席の連絡を受けています。

総合教育会議は、原則、公開での開催となります。

それでは始めに、中崎町長からご挨拶申し上げます。中崎町長、よろしくお願いいたします。

【中崎町長挨拶】

中崎町長) 皆さん、おはようございます。令和4年度第1回「大磯町総合教育会議」にご出席いただき、ありがとうございます。

本日の総合教育会議は、「大磯町で『学び』『育つ』子どもたちのために」がテーマです。

今年度から、これまで導入に向け研究を進めてまいりました「学校運営協議会制度」、いわゆる「コミュニティ・スクール」が、全ての町立幼稚園・小学校・中学校に設置されました。地域の皆さんの力をお借りしながら、地域とともにある学校の構築のために運営がスタートしています。本日のテーマにも関係する非常に重要な部分でもありますので、この点も含め、委員の皆さんからご意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

政策課長) 中崎町長、ありがとうございました。

それでは、議事に移らせていただきます。議事の進行は、大磯町総合教育会議要綱第4条第1項の規定により「町長が議長となる」とされていますので、議事の進行につきましては、中崎町長にお願いしたいと思います。

中崎町長、よろしくお願いいたします。

【(1) 報告事項 令和3年度第2回総合教育会議における協議内容の報告「教員の働き方改革について～教育のデジタル化に対応するには～」】

中崎町長) 議長を務めさせていただきます。まず、事務局から令和3年度第2回の総合教育会議での協議内容及びまとめの報告を報告事項としています。資料を用意させていただきましたので、簡単に説明し、その後協議に入っていきたいと思います。

事務局、よろしくお願いいたします。

政策係長) 政策課の秋本です。よろしくお願いいたします。

それでは資料に基づき、説明させていただきます。

まず、議題の(1) 令和3年度第2回大磯町総合教育会議のテーマ「教員の働き方改革について～教育のデジタル化に対応するには～」の協議内容についてです。

このときの協議事項は、「ICTを活用した教育の導入により、今後の教員に何ができるのか」であり、1つ目に「ICT活用指導力向上のための研修強化」、2つ目に「効率化によりできた時間を子どもたちへの指導等」、3つ目に「個々の子どもに応じた、よりきめ細かな指導の実践」、4つ目に「スポーツ文化においてもオンラインを利用した専門家の指導の導入」、といった4項目を中心にご意見をいただきました。

まず、1つ目の「ICT活用指導力向上のための研修強化」につきましては、「教材作成に一生懸命になりすぎて、業務量増になれば本末転倒である。既存の優秀なソフトを有効活用してもらいたい。」といった意見や、「デジタル教育に関する研修などやっていかななくてはならない。しかし急速に進めるのではなくて、段取りを踏みながら、しっかり研究をしていてもらいたい。」などの意見がありました。

次に、2つ目の「効率化によりできた時間を子どもたちへの指導等」につきましては、「ICT活用により目指しているのはチーム学校による協働の校務、用務の効率化、文章や情報の共有化である。」といった意見や、「義務教育の場において先生方は、子どもたちの人間力をつけてもらう時に接した大人である。教育というのは、その子を作り上げるうえで基礎になるものである。あくまでも人が基本だという教育を大磯では実施してほしい。」などの意見がありました。

次に、3つ目の「個々の子どもに応じた、よりきめ細かな指導の実践」につきましては、「令和元年に開校3年目の特別支援学校は、コロナを利用することも大事という考えのもと、ICT環境を整え生徒の実態、ニーズに合った教育を中心にされた。」といった意見や、「現場の先生方の授業や何かの活用についてはあくまでツールだと思っている。やはり基本は対面なのだと思う。デジタル化が進んできて本来そうあるべきではないか。」などの意見をいただきました。

最後に、4つ目の「スポーツ文化においてもオンラインを利用した専門家の指導の導入」につきましては、「現場の先生方の授業や何かの活用についてはあくまでツールだと思っている。やはり基本は対面なのだと思う。これはいくらデジタル化が進んできて本来そうあるべきではないか。」といった意見や、「子どもというのは私たちが見ている以外のものを見ているところもある。教育というのは先生と生徒だけで成立するものではない。」という意見をいただきました。

以上が、前回の会議で皆さんからいただきました意見となりますが、ポイントをまとめますと、『「教育のデジタル化の推進」と「効率的な働き方」に加え「対面での『こころ』の教育」も大切にし、子どもの心の成長と豊かな学びとなることが望ましいということが共通の認識である』として、簡単ではございますが、令和3年度第2回大磯町総合教育会議における協議内容のまとめとして報告させていただきます。

中崎町長) 令和3年度第2回総合教育会議で、いただいたご意見を資料の形に集約しました。

ICTは大事であるが、あくまでツールであると繰り返し先生方から話をいただきました。デジタル化と言って何か新しい教育が突然起こってきたように受け止めるのではなく、従

来の人と人との教育を大切にしながら、ICT技術という1つのツールを用いて、子どもたちの広い見知のなかで、「ものを考える」というふうになってほしいと考えるとともに、先生たちが効率的な働き方のもとに、子どもの心の成長と豊かな学びのため、対面での「こころの教育」を行うことが望ましい、というまとめをしました。

ご異論がなければ、事務局のとおり、令和3年度第2回の総合教育会議のまとめとさせていただきます。

【(2) 協議事項 「大磯町で『学び』・『育つ』子どもたちのために」】

中崎町長) それでは、本日の協議事項であります、次の議題(2)「大磯町で『学び』・『育つ』子どもたちのために」という議題に移らせていただきます。事務局お願いします。

政策係長) それでは、議題(2)協議事項『大磯町で「学び」・「育つ」子どもたちのために』について、説明いたします。

近年、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。デジタル化の波は、子どもたちの環境にも広がっています。GIGAスクールが推進され、子ども一人ひとりがタブレット端末などの機器を活用した、学習活動が行われています。

また、新型コロナウイルス感染症により、授業や部活動などの学校生活が、感染拡大前と大きく変化し、今までどおりにはできない状況となりました。学校による感染対策の徹底などにより、少しずつ今までのように戻りつつありますが、学齢期の人間形成に必要な友人などとの交流や体験が希薄化してしまうことも懸念されています。

さらに、新しい考え方や取り組みでは、全世界的にはSDGsにおいて「質の高い教育をみんなに」とあり、日本など基礎的な教育が確立している国は「生きる力となる教育」を確保することが掲げられています。また、ダイバーシティ「多様性の尊重」では、様々な立場や意見を持つ人と、自分との相違を理解し、共に生きていくことが求められています。さらに、コミュニティ・スクールは、学校と地域の連携が一層強まり、相互に支援し発展していくものであり、大磯町でも令和4年度から各学校・園において協議体が設置され、今後さらに活動が広がっていくものと思います。

以上のように、これからの子どもたちは「子どもを取り巻く環境の変化」や、「新しい考え方や取り組み」など、多様で複雑化する社会では、どの様に対応するか「答え」が見いだせない課題に直面することがあると思います。まさに、子どもたちには混とんとした時代を「生き抜くための力」を育てていく必要があると考えます。

さて、そのような時代を生きていく、生き抜いていく子どもたちを、私たちはどのように育てていけばよいのでしょうか。

幸いにも、「大磯町教育大綱」には、「『大磯らしい』美しい自然と由緒ある歴史・文化を大切に教育をめざし、地域と連携し子どもたちをはぐくみます」としてあります。

それでは、1つ目の「美しい自然」、2つ目の「由緒ある歴史・文化」、3つ目の「地域

と連携」というこの3つのテーマで、大磯町の状況を確認したいと思います。

1つ目に「美しい自然」としまして、大磯町は高麗山・鷹取山（大磯丘陵）といった山々の緑と、照ヶ崎海岸、こゆるぎの浜の紺碧の海に囲まれた自然が豊かな地域です。照ヶ崎海岸が日本最大級の「アオバトの集団飛来地」として神奈川県天然記念物に指定されたことは、その証とも言えます。身近な自然を大切にすることを育むことと、反対に自然災害など「危険な部分」も学ぶこと、まさに「人間の力を越えた存在」であることを感じる環境にあります。

2つ目に「大磯らしい」由緒ある歴史・文化です。相模国総社である六所神社や高句麗からの渡来伝承がある高来神社など歴史ある社寺等があり、県の無形民俗文化財である「国府祭」や国の重要無形民俗文化財である「左義長」など、地域には多くの伝統的な祭事が受け継がれています。さらに、明治期の立憲政治確立等に貢献した大隈重信や陸奥宗光等がこの地を愛し、建てられた邸宅を後世に継承するため明治記念大磯邸園が整備されています。そして昭和期においては、旧吉田茂邸など、歴史的遺産が数多く残されています。さらには、文化・芸術分野においても、安田靉彦や堀文子など多くの文化人が居を構え、活動された町でもあります。大磯町の児童・生徒にとっては、教科書に出てくる人物を身近に感じることができます。

3つ目に「地域と連携」としては、小学校の放課後における子どもの居場所として放課後子ども教室、通学時の交通安全の街頭見守りや、部活動等の外部指導者、地域のスポーツクラブなどの指導、青少年指導員によるイベントなどの活動、など多岐にわたり地域の方の献身的なご支援により、子どもたちは安全・安心な学校生活や、放課後や休日に様々な活動に体験することができています。

このように、町として取り組んできた内容や、地域の皆さんからいただいている支援をもとに、複雑で多様化する社会を生き抜くため、大磯町で「学び」・「育つ」子どもたちのため、これから「大磯町が持つ『潜在的な魅力』をどのように教育活動の中で生かしていくのか。」といった点、また、コミュニティ・スクールなどが運営され、学校と地域のつながりが一層強く結ばれていくなかで、「今後、大磯町の子どもたちをどのように、地域で育てていくのか。」といった点について、本日は、教育委員の皆さんとご意見をお話いただければと思いますので、よろしく願いいたします。

中崎町長) 事務局が説明しました、資料の9ページ以降、「大磯町で『学び』・『育つ』子どもたちのために」について協議いただきますが、10ページには「子どもたちを取り巻く環境の変化」について示しています。コロナ禍では、子どもたち同士の意見交換や実際に体験することができない状況です。また、デジタル化が進行し、机に向かって勉強するだけといった環境になり、子どもたちが孤立しているような気がします。

社会全体としては、質の高い教育も提供できるようになってきているとともに、多様性の尊重も大きな問題になってきています。コミュニティ・スクールの中で、従来のように学校の先生だけでなく、多くの大人と子どもたちが接触し、学んでいくことが大切です。

資料の12ページにあるように、複雑多様化する社会で子どもが将来に向けて生き抜いていける力を育てていく必要があるということで、今回このテーマを選びました。

大磯町教育大綱には、『大磯らしい』美しい自然と由緒ある歴史・文化を大切にする教育をめざし、地域との連携し子どもたちをはぐくみます」という言葉があり、これは大磯が誇るものであり、他にないものであると思いますし、子どもたちにも教え、しっかりとした基盤を作ってあげねばならないと思います。

子どもたちは良い意味でこの豊かな環境が身近過ぎて、この意義を理解しているかわからないですが、改めて大磯町教育大綱について、彼らに考える機会を与えることも、大きな教育の要素であると考えます。

そして、資料21ページにありますとおり、大磯で「学び」・「育つ」子どもたちのために、「大磯がもつ『潜在的な魅力』をどのように教育活動の中で生かしていくか」と、『今後、大磯町の子どもたちをどのように、地域で育てていくのか』について、委員の皆さんの意見をいただければと思います。

まず、濱谷教育長職務代理からお話をいただきますが、時間を決め、1人10分ほどでお願いします。

濱谷教育長職務代理) 今回の協議テーマを読ませていただき、日頃我々が考えていることと全く同じであると感じました。

令和4年度大磯町教育委員会基本方針の中において、「学校教育の基本方針」の項目では、大磯町教育大綱と同様に「人と人との関わりの中で、確かな学力・健やかな体・豊かな心を育む教育と、保護者や地域に信頼される開かれた学校づくりの実現をめざします。」とあります。「確かな学力・健やかな体・豊かな心をはぐくむ教育」については、各学校で色々と具現化していただいているとともに、「保護者や地域に信頼される開かれた学校」という面では、導入されスタートしているコミュニティ・スクールによって実現できていると考えています。

令和4年度大磯町教育委員会基本方針の、「学校教育の基本方針」における「目標」としていくつか項目がありますが、その3つ目に「各小・中学校では、学習指導要領の趣旨を踏まえ、適切な教育課程を編成し、保護者や地域に信頼された開かれた学校づくりや大磯らしい特色ある学校づくりに努める。」と書かれています。ここで問題になってくるのは、「大磯らしい特色ある学校づくり」の部分で、「大磯らしい」というと、大磯町教育大綱にもありますが「美しい自然」、「由緒ある歴史・文化」、「地域との連携」を教育現場に落とし込めば、大磯らしい教育ができるのだろうと考えます。

私は、大磯らしい教育の1つとして、大磯町、株式会社ワコム、株式会社セルシスと株式会社アイネットで相互連携を強化するために締結した「ニューノーマルデジタルクリエイティブ教育推進に関するパートナーシップ協定」が、まさにデジタル化時代の大磯らしい教育であると考えます。

この取組みは、これまでペンや筆などで紙に描いて行われてきた「アナログの創造活動」

をデジタル環境で行うことに加え、ネットワークの利便性を活用して作品を共有し共同で作業するなど、「デジタルならではのメリット」を生かした創作活動を教育に積極的に取り組むものとしていますが、それをアートだけでなく、「確かな学力・健やかな体」にも活用することができないかと考えています。それができれば、さらに一步進んだ大磯らしい教育ができると感じています。

協定締結時の記者発表において、町長は「これからの社会において大切な教育とは、目で見て考え、人の意見を聞き、そして自分の思いを表現することだと考えます。この取り組みの中で、絵を描くプロの方々が使用する最新の機材とともに、アプリなどソフトウェアをご提供いただき、世界に先駆けて大磯の子ども達が実際に使用し絵を描くことは、創造的思考を育むことに繋がると思います。子ども達の笑顔が輝くよう、町としても応援いたします。」と発言されています。また、株式会社ワコム代表取締役兼CEOの井出氏は、「『絵を描くことが好きでたまらない！』この想いを生徒さんたちが持ち続けられるよう、全力で支えていきます。絵を描くことは特に好きではない生徒さんたちにも、『こんなことができるんだ！』という新しい発見を提供したいと思います。」と発言されていました。

まさに、この取り組みが大磯らしい特色ある教育を進めていく1つのきっかけ、新しい取り組みの1つになると考えています。

そして、令和4年度大磯町教育委員会基本方針の、《学校教育の基本方針》における[目標]の4つ目には、「学校、保護者、地域の方々との諸課題を共有しつつ協力体制を築き、大磯らしい美しい自然と由緒ある歴史・文化を大切にする教育を目指して教育活動の展開を図ります。」とあります。学校の先生たちが、「わたしたちのおおいそ」という副読本を活用されていますが、せっかくならば、子どもたちが使用するタブレットの中に電子書籍化することができないかと思っています。子どもたちが毎日持っているタブレットの中で、大磯の歴史や誇りというものを、具体的にタブレットを開けばすぐに学ぶことができる、確認することができる、という意味で電子書籍化も大磯らしい教育の1つになるのではと考えました。

では、大磯らしい教育を現場の先生方はどのようにして具現化をしてきているか、ということをお話しします。我々は教育委員会定例会の後に必ず施設訪問を実施しています。町内の小・中学校、幼稚園、そして分校に視察に行きます。そこで必ず学校要覧を頂戴します。そして授業見学、あるいは、学校の施設見学をさせていただきます。また、昇降口、教室、廊下等に掲示されている子どもたちの作品等を見えています。

施設訪問では、学校、幼稚園、分校がどういう経営をしているかを私達なりに分析しています。例えば、「校内環境はどうなっているか」という視点では、昇降口の靴箱を見れば、一目瞭然で日常の清掃をしているかわかります。あるいは、授業風景を見れば、教師と子どもたちの雰囲気でのどのような授業展開が行われているかがわかります。

また、「学習の転換」の観点では、今までの教師主体の授業が、今や学習者が主体の授業

へと変わっていますが、それがどのように展開されていくのか、授業見学をすればある程度見えてきます。

児童・生徒の作品等を見れば、日常教育の現場の中で、大磯の持っている歴史・風土がどう展開されていくのかということも見えるでしょう。同時に学校長と話をすれば、学校長の教育の理念というものがわかってくる、それは、どう大磯町教育大綱を理解しているのか、さらに深く考えていけば、神奈川県「かながわ教育ビジョン」や「かながわ人づくり推進ネットワーク」をどう理解しているか、ということが見えてくるわけです。

こんな形で私達は、大磯らしい教育というものを、教育委員会定例会の施設訪問を通してながら見ているわけです。

ただいま色々とお話しした中で、特に進めてもらいたいのは、「ニューノーマルデジタルクリエイティブ教育推進に関するパートナーシップ協定」を活用し、デジタル教育を進めていただきたい。そうすれば、魅力ある教育ができると思っています。

もう1つは、ICTの活用も必要であると思いますが、忘れてならない「昭和の教育」も必要であると思っています。

1つは、子どもたちには「何かを身に付ける」ということを教えていきたいと考えています。では、何を使って道徳的なものを教え込むかということで考えたところ、「茶道」を通して身に付けることで、道徳的なことを教えることができないか、あるいは大磯らしいことを身に付けることができないかと考えました。

1つは「の」の関係というものを子どもたちに、教えてもらいたいと思っています。

どういうことかという、私「の」先生、先生「の」生徒というときの「の」という言葉が「輪」、つなぐ言葉であると考えます。私「の」先生、先生「の」生徒、まさにこれはつなぐ言葉ということになります。昔は、家庭は親の子、あるいは子の親、という言い方をしてきました。「の」の関係がどこにでもありました。それが、戦後、アメリカの民主主義について誤った捉え方をしてしまい、いわゆる「の」の和らぎが消えて、「と」という個人主義になってしまったと考えます。私「と」先生、先生「と」生徒あるいは、お父さん「と」私、お母さん「と」私、というように「と」という個人主義になってしまっている。いわゆる社会の中の自分、と2つが一体だったものが、親と子になってしまったことによって、ギスギスした人間関係になってしまったと思います。今まで日本がつくってきた一体感というものが、「の」の関係であったようです。

もう一度、「の」の関係を持つことで、輪の関係を構築していかなければならない。まさにそれは、どんな人とでも、手をつなぐ、共生することができる、受け入れて生きていくことができる、というふうにつながってくるわけであります。そのような学校づくりをもう一度、考えていかなければならないのであらうと思っています。忘れてはならない事であると思っています。

先ほど「茶道」という言葉を使いましたが、お茶の緑色は自然の色です。いわゆる人間

が自然と一体感を得るのがお茶だろうと思います。そのため、そこに興味を持てば環境問題に敏感になると思います。そして、緑を守ろうという気持ちにもなってくるわけです。さらに、お茶を考えていくと、茶道の舞台には掛け軸、華が飾ってあります。お茶の世界では、重要な意味を持っています。

例えば、「主人公」という掛け軸があれば、これは「自分というものが主体性を持ってお茶を点てていかねばならないのだな」ということ、あるいは、「自分とはいったい何なのだろうな、自分がこの茶室にいる意義は何だろうな」ということを考えていくということが、その掛け軸の中に込められていると思います。

そして、掛け軸やお茶碗を見るというものが茶道の中にはあります。拝見という言葉ですが、しっかりとお茶碗、掛け軸の持っている意義、お茶碗の温かみを持っているもの、これを確認していく、ということは謙虚な心でそれらに接していくというふうになるわけです。お茶を飲むときには、お茶碗を回して、正面を避けて飲みます。これは謙虚な気持ちの表れと茶道の世界では教えています。また、茶道では準備と後始末をきちんと行います。そのため、けじめが身につくということにつながります。

お茶という1つのツールでお話ししましたが、大磯らしい教育の中で、総合の時間だけではなく、通年授業の中で教えていく、これもまた大磯の特色ある教育の1つになるのではないかと考えています。今まで勉強してきたこと、見学をして学んできたことを整理していくと、このようなことがいえると思います。

最後に1つ、去年の8月に、教育長から大磯町の教育ビジョンというものを、お話しいただきました。今後これをベースとして議論を深めていくのだと思います。ビジョンをつくる、ミッションをつくる、パッション、そしてイノベーションということで、このような積み重ねによって、大きな成果が生まれてくると思います。このようなことが実行できれば、事務局が掲げた人づくりに邁進していくと思います。時間が来ましたので、以上とさせていただきます。

中崎町長) ありがとうございます。全ての委員にお話をいただいた後で、お互いの意見交換の場を持ちますので、続けて曾田教育委員お願いします。

曾田教育委員) 私と大磯町の関係は、この町の教育委員になってからだと思います。平成26年1月17日からなので既に9年が過ぎたと考えています。

ところで、私は昔から時代小説を読むのが好きで、今ではチャンバラという言い方になっていますが、日本各地の話は出てくるのですが、大磯町の話はなかなか出てこないのです。私は大磯について詳しく書かれた小説に出会ったことがありませんでしたので、なぜだろうと考えました。

例えば、江戸時代ですと、大磯町は江戸をスタートしたばかりの土地であり、帰りも江戸までもうすぐそこでしょうから、大磯の話は出てこない。横浜あたりの話、それから静岡の三島あたりの話は出て、大磯町は出てこない。ひょっとしたら通過するだけの町だ

ったのか、なぜ大磯町にも宿がたくさんあったのに、帰る気持ち、行く気持ちの交差する中で、何か特色のあるものがあつたわけではなく、きれいな海や山があつて美しい町だと言っても、そういう景色は多少なり沢山ありますので、話題にならなかつたのかとずっと考えています。教えていただければありがたいのですが、私の読んだ中では、大磯町が舞台になつた作品は少なくとも江戸時代にはなかつたように思います。それを舞台にした小説も少ないのだろうと私は思います。

それが良いか悪いかは別として、私はこの町の子どもたちの心の問題を考えています。この町にはいろんな心の問題、悩みを抱えた保護者の方がたくさんいると思います。

それは、大人の中でもコロナ禍の3年間を含め、世の中ストレスがたくさん溜まっているもので、聞いたことのないような事件が起きたりしています。つい先日も元首相が銃で撃たれるような事件がありました。どうなっていくのだろうという心配がたくさんあるわけです。

子どもたちは、子どもたちでストレスがたくさんありますので、大人と比べてどう対応していけばよいか、やはり他人に相談するとか、できる部分とできない部分があります。そういったことを自分で考えていかねばならない、子どもの行動でストレスや悩みに気づくことがどうしたらできるのだろうということを日頃から考えています。

それから、大磯町の小学校、中学校、分校も含めてですが、なかなかそういう話が出てこないのが現状です。先生方ももうご存知かとは思いますが、この町の本当の課題は何なのかということに目を向けるべきだと考えています。

私達は教育委員として町を通過するだけの委員かもしれませんが、様々な会議や施設見学を通じ、皆さんに思慮いただいています。しかし、これだというものなかなか掴めず今日まで来ています。

先日、教育研究所の所長から相談があり、子どもから「射撃について興味がある」と相談され、「誰か相談を受けることができる方を知らないか」と聞かれ、私自身が40年間、射撃部の監督をしていたと答えたところ驚かれたことがありました。その子は、現在伊勢原高校の射撃部に入りました。不登校だった子ですが、恐らく相当悩んで、思い切って先生に打ち明けたのだと思います。たまたま私がいただけのことでしたが、良い方向に話が進みました。教育委員になって初めて仕事になったと思ったことがありました。

子どもの気持ちを考えますと、相談するときにそういう人が誰かいれば良いとつくづく思ったことがあります。今後どうしていったらいいのかと子どもの問題もたくさんありますが、心の問題をどう扱うかということは、小学生でも中学生でも一番悩むところです。

親に相談しても「そういう話はあとでしろ」と聞く耳がないこともありますので、学校でも相談に乗ってあげられる方がいないのかと考えたところです。非常に難しい話ですが、子どもたちの心の問題をどう取り上げていったらよいか、少し考える時間があると良いと考えています。

子育てとは、家族の問題や、地域、社会、全てが一体にならないとできないことでの

で、子どもたちの心をどう掴んでいける町なのか、そのことをこの町が考えていくことも大変良いのではないかと思います。人口的には3万人程度の町ですから、取り組みやすいだろうと思いますし、美しいというだけではなく、心の悩みにも関わっていける町であることが大事ではないかと私は考えています。

時間的には短いですが、一番言いたかったことは、子どもたちの心をどこで捉えることができるか、この町の悩みをどうしたらよいかと考えている今日この頃です。以上です。

中崎町長) ありがとうございます。では、トーリー教育委員、お願いします。

トーリー教育委員) 私も保護者の立場で今回の「学び」・「育つ」、「大磯町で『学び』・『育つ』子どもたちのために」というときに、やはり一番重視したいのは曾田教育委員と同じで、心の部分です。ICTの活用に関しては議論しつくされている部分もありますので、曾田教育委員のおっしゃった心の悩みにも関わっていける町であることは、すごく良いことであると思いますし、ぜひできればと考えます。

私の子どもも大きくなりましたが、小学校の頃から様々なお子さんを見ている中で、心の問題というのは本当に底が見えないと感じるとともに、ご家庭の事情もあるので、立ち入れるもの、立ち入れないものがありますので、すごく難しいと思います。

いじめが無いと思っていましたが、案外パーセンテージ的に多かったのが衝撃でした。

コロナ禍などにより時代が殺伐とした状況にあります。元首相の事件や、世界を見ればウクライナ情勢もあります。また、自然環境も大きく変わってきていて、だんだん日本も四季がなくなってしまうのではないかなど、心身ともにあまりに変化が多いと感じます。

そういう中で、根を張ったような人間としての強さや生き抜いていくための強さを身に付け、何かあったときや大人になったとき、責任を取ることができる人間になることが大切であると考えます。

家庭内に問題がある方は世の中では結構いらっしゃると思います。他人に責任を押し付けるのではなくて、きちんと責任を取れる、子どもにはそういう人間になってもらいたいと願っています。

これからの時代は特にですが、土に根を張ったような強い気持ち、くじけない気持ちをどうしたら育てていけるのだろうかと考えています。あまりに複雑で見えないものが多いものですから、単純になにかあるかな、と思って聞いてもすぐに答えてくれるものではないでしょう。子どもも「言いたくない」、「言えない」というのもあるし、「親には知られたくない」とか、ご家庭の事情がある場合もあり得ます。町はどうやって上手く仲介し、良い方向へもっていけるのか、以前より苦慮しているところです。

ただ、課題があってもすぐに答えが出るものでもないのが難しいのですが、そういう意味ではコミュニティ・スクールにも解決の一躍が期待できるのではないのでしょうか。大人

の他人、いわゆる家族でない地域の大人というのもやはり必要になってくると思います。

そういった意味でも、コミュニティ・スクールをどんどん良い方向に持っていければと考えます。いきなり知らないおじさんおばさんが「どうしたの」と聞いても、心を開いて答えるわけでもないので、今はコロナ禍で交流が難しい状況ですので、難題ではありますが、大磯町は継承していきたい行事や文化がたくさんありますので、そういった場を積極的に活用して交流できるような場が作れたらと考えます。例えば、お祭りでは太鼓をたたくため練習期間を設けていますが、期間限定ではなく日常的にそういう機会を作っていければ良いと思います。

コロナ禍でまた感染者数が増えてきて、また何か制限がかかったりするのではという不安もありますので難しいところではありますが、そのときこそ上手くICTを活用しながら、オンライン形式なんかで何か伝えられることがあるのではないかと、そういう使い方できないかと、検討しても良いのではないかと考えます。

せっかく、「大磯町で『学び』・『育つ』子どもたちのために」という「大磯町で」というところを意識して、大人になったときに大磯町を誇りに思える郷土愛の強い子どもを育てていけるような町になってほしいと思います。

大人になると、都会に出て大磯に帰ってきたときに、すごく静かで落ち着いていて平和でいいな、とほっとすることがあります。私は、子どもの頃に大磯は田舎だな、早く都会に出たいと思っていましたが、うちの子どもも同じだったのですが、学校で少し遠くに行くようになってから「大磯って良いな、もし自分が大人になって、結婚して子どもができたなら、子育てにはこんないいところはないよ」と言うようになりました。そのような思いを持てるお子さんに一人でも多くなっていただけるような教育ができたらというような気持ちがあります。

大磯町のみならず、将来的には日本でも世界でも出て行けるような自己アピール、プレゼンテーションの力をしっかり持ち、責任を持てる。そして、他人を慈しむことができる、こういう子どもを大磯町で育てたいと思います。

具体的な話ではないですが、学力はもちろん重要ですが、学力の前に、心と体の健康ありきだと考えますので、そこの部分を色々な人の力を借りながら、前に進めていければ良いと思います。抽象的な表現になってしましますが、子どもが子どもらしくまっすぐと地に足の着いた子を育てていけるような上手いICTの活用と、人との係わりに尽きるのではないかと感じています。

中崎町長） ありがとうございます。それでは熊澤教育長、よろしくお願いします。

熊澤教育長） 今日のテーマは「学び」と「育ち」です。特に「学び」の面では、子どもをとりまく環境の変化は非常に激しいです。その第一はデジタル化です。町内の学校の授業参観をみても、子どもたちはタブレットを使いこなしています。すごいなと思いました。おそ

らく、そこで教えている先生はそのような教育は受けていません。今までと異なる新たな試みになっています。その変化の大きさは、教員にとっても非常に重いものがあります。

私達が教えていた頃は、簡単に言うと「チョークとジョーク」で楽しい授業をやって、十分事足りていました。全てが「承り学習」の形で、極端に言うと記憶したものをテストする、暗記のテストで成績が良い悪いという評価をずっと実施してきました。

しかし、時代が進むにつれ、子どもがお互いに学び合わなければだめだという考えが出てきました。基本的に、教師は勉強をして、大学も出て、研修をし、色んな知識を得たり、経験をしたりした、それなりの資格を持った人が教壇に立っているわけです。一番元は、その教師が子どもに伝えるという伝承の文化のようなものだったわけですが、単に先生が言ったことだけではなく、子ども同士がお互い学び合ったり教え合ったり、今でいう総合学習というものが増えてきていました。

ところが、この「GIGAスクール構想」では、先生と生徒の間に機械が入っています。子どもはタブレットを見て、教師もタブレットを見て、先生は子どもを見ているのか、というくらいタブレットを見てやらざるを得ない状況が非常に増えています。

今までは、私は「教師の一挙手一投足が子どもに影響を与える」とずっと言ってきたのですが、そんなことよりも子どもはタブレットの画面を見ているので、教師が叱ろうが笑おうがあまり影響がないのかなと思ってしまうくらい変わってきています。これから先、もっともっとそういう状況になりえるだろうと思います。

私は、タブレットを導入するときに「これは道具だ、鉛筆や消しゴムと同じに扱ってください」としていました。導入当初は、皆さん管理のことを気にして「壊れたらどうする、壊したらどうする」という話が多かったですが、「壊してもよいので鉛筆や消しゴムと同様自由に使ってください」としてきました。そうすることで、タブレットに慣れさせることが出来るとともに、これから先は授業の内外問わず、色々な知識や能力がデータベースとして機械の中に入ってくるだろうと思います。それをいかに活用するか、が今後大切になると思いますし、それがだんだん現実的になってきています。

基本的な学びの中で、意地悪な入り方をしてきたのが新型コロナウイルス感染症で、人との接触を奪ってきました。みんなでお互いに学び合おうというのに、離れなければいけない、やろうとしていることを妨げる形になっている気がします。

また、コロナ禍によって一時的に学校を休業しなければならない時期がありました。その時に問題になったのは、子どもの学びをどうするのかということです。

すると、多くの子どもの学ばなくていいという選択をしてしまうのではないかと、学びとは主体的にやるものではないか、という意見が出てきました。

主体的に学ばせながら個人個人の学びを進めていくため、家や別の部屋にいても学べるように、授業をオンライン配信するなど、盛んにおこなわれていました。

ところが、教育委員の皆さんの意見もそうですが、「やっぱり対面だよ」という話が必ず出てくる。ここがコロナ禍の意地悪なところで、早く収束してほしいと思うところです。

学びは、今、大きく変わろうとしていて、先生方もかなりの負担を背負いながらやっています。私は今年、町内4校全てコミュニティ・スクールにしてください、とお願いしていました。というのも、学校だけでは子どもたちを支えきれない状況があるからです。正直に申し上げて、先ほど曾田教育委員やトリー教育委員がおっしゃった心の問題ももちろんそうです。家庭内もそうですが、やはり町全体が学校にならないとダメだと私は思っています。社会教育に携わったときから大磯町を学校にしたいと話をしてきたのですが、「そうはいつでも他人の子どもに声かけられないよ」という状況がたくさんあります。逆に、いろんな事件があると、子どもも「変なおじさんには絶対反応しないように」という指導を受けます。ですが、コミュニティ・スクールを通じて、地域で子どもを育てる町にし、「大磯の子どもをみんなで育てていこう」という町にしていきたいと思っています。

地域で協力していくためには、デジタルツールを上手く使いながら、人が人を育てるといったところに特化していかなければならないと考えています。以上です。

中崎町長) 4人の教育委員の皆さんから意見が出まして、本来教育というのは「心と心をどういうふうにつないでいくか」とうものであるということをお話しいただいたと思います。

熊澤教育長が申されましたが、生徒と先生の中にパソコンが入ってきたことで、今まであったものがいったん瓦解してしまうようで、直接的な温かみが伝わりにくいようなこともある、ということでした。

GIGAスクール構想におきましても、タブレットという文明の利器の使い方、それを実際に使った中で、子どもたちの心をどういうふうに教育していく必要があるか、先生たちにも勉強していただかなくてはいけないと思っています。様々なことで子どもと接する教育の責務というものは大変大きいのですが、そこを皆さんで、令和3年度の2回目で協議した、子どもたちの豊かな成長、どのように育てていくか、というところにつながっているのではないかと私は思いました。

それでは、先生方で追加的にまたディスカッションがあればよろしくお願いします。

曾田教育委員) では、よろしいでしょうか。私はこの町はどんな悩みを持っている町なのか、住民の声を聞いてみたいと思っています。それぞれの家庭の色々な教育がらみの問題等がありますように、この町が持っている、ごく普通の悩みはどんなことがあるのか、住民は何を考えているのか、そういうことを聞いて答えてくれる人がいるかどうかちょっと聞いてみたいなと思いました。

町の根本的な悩み、心の悩みというのはどこの課がどのように相談に乗っているのかなどをみてみたいと思います。

中崎町長) 曾田教育委員がおっしゃったことは、悩みの種類に寄るもので「道が傷んでいるよ」や「あの木が邪魔だよ」という悩みにつきましては各担当課で承れます。

しかし、心の内面について悩みを直接的に受け止めるのは難しく、また、教育の分野に関しては子どもたちに直結しているのも、特に壁は高いと私は考えています。

曾田教育委員) 難しいのは承知ですが、町長も医師でしたので、人の心を分かっていると思いますので、そういう課があっても良いと思います。

教育分野に関しては、教育研究所がその窓口になり得るのではないかと考えています。先ほどお話ししましたように、当時不登校だった中学校3年生の子が、高校に入学して射撃部に入ったのを見つけたのがきっかけだったのですが、そういう相談できる場所があればいいと考えています。

中崎町長) 他の委員の方でご意見ございますか。

トリー教育委員) 今の曾田教育委員のお話ですが、例えば、教育研究所で「住民の皆さんもお話も伺います」というふうにすると、クレーム処理所になりかねないので、難しいところだと感じました。

もう間もなく夏休みに入りますが、宿題をたくさん出すのではなく、主体的に何かに特化して宿題を出されてはどうかと思います。

例えば、「自分の興味のあるものでレポートを1つ書きなさい」というのはどうでしょうか。工作ならば工作でもいい、家庭科なら家庭科でもいい、なんでも教科も関係なく、それを成績として反映するのではなく、自分が興味あることを、とにかく1つ夏の間には貫徹する。そういうすっきりした宿題も良いのではないかと思います。

学校がどのように考えていられるかわからないのですが、個人的には、できるだけ宿題は多くない方が良く考えています。親御さんによっては、「宿題がないうちの子が勉強しないからたくさん出してください」というご家庭も当然あるかと思っています。ですが、コロナ禍で色々なことがある時代ですので、こころの部分が育つような課題を考えていただければと思います。

濱谷教育長職務代理) 今、トリー教育委員がおっしゃったことで思い出したことがあります。

2021年10月21日に教育委員会定例会で大磯小学校を訪問した際にいただいた学校要覧を持っているのですが、大磯小学校の取組みについて「自ら学ぶ、従来の夏休みの宿題廃止、〇〇名人」と書かれています。トリー委員がおっしゃったことは、まさにこういうことではないかと思います。それが4校に広がっていくと良いですね。

それから、様々な体験をするためには、実践し学ぶことが重要です。農家や漁師の方に来てもらって勉強するのも良いと思いますし、学校研究の充実で、生活科、総合的な学習の時間で「大磯学」をやっている。また、星槎国際高等学校湘南学習センターの学生が神奈川県警の「かながわサイバーポリスサポーター養成講座」を受講し「サイバー防犯ボランティア」になった報道もありました。本当に良い取組みをしていると思います。

曾田教育委員) 私が学生生活支援室に勤務していた頃、学生や親から様々な問題が相談されてきました。元首相の事件で宗教団体の報道もありますが、そういった問題も相談のなかにもありました。その頃の青年はそういう問題をいっぱい抱えていたわけです。私は本当に、親はその辺を配慮しなくてはいけない、やはり心の問題だと感じています。それを解決するには、家庭における貧富を問わず、皆で見守ることができる配慮のある社会にしたい、ということを感じておりました。

中崎町長) 他にありますか。では教育長、各教育委員の方々の意見をお聞きになって、教育長としてのお話をお願いします。

熊澤教育長) 最初に濱谷教育長職務代理がおっしゃったように、学校は昔から「不易と流行」があります。子どもの心の問題も含めて、指導の問題として「これだけはだめだ」というものを必ず持って指導しています。今、教育は様々な面で改革を進めているところで、「今どきはこうだ」というものをどんどん入れ込んでいる状況です。しかし、ただの流行ではなく、「不易」が消され、それが教育の全てになろうとしているのではないかと懸念しています。

大磯中学校に赴任した際、私は教育相談をやっていたものですから、教育相談の部屋を各階につくり、その部屋にお茶とお茶菓子を用意して、子どもが来たら「お茶飲む？」と迎え入れようということを実施した覚えがあります。過去のことではありますが、そういう環境は学校にとって大事な状況になってきていると感じます。

小学校も様々な子どもがいるので一緒に学びたいと思っていますが、学校の中でもまずは大人がインクルーシブでできるということをやっていかなければいけません。町全体でお互いに認め合いながらも声掛け合っていこうよ、という状況にするのが一番良いと思います。

最後に、今ちょうど生涯学習課で取り組んでいる歴史の本がございます。町長が篤志家から寄付をいただいたのでこれを本にしなさいと言ってくくださったのですが、今いろんな方から原稿を集めていて、それを読むだけで「大磯ってなんて素晴らしい町だ」と感激すると思います。今年中に本になりますので、是非読んでいただきたい。あの文章を見たら「こんな町は日本中にないな」って言える素晴らしい町だなと私は思います。そこに住んでいる子どもたちが「大磯は素晴らしいよ」と言えるような状況をつくってあげたいと思います。寄稿いただいている人の中にも、子どもの頃に「大磯に住んでいます」というと「いい町ね」って大人から言われたと書かれていました。「何がいい町かはよくわからなかったけど、今になってみるとやっぱり大磯って素晴らしい」と続きます。

大磯町は歴史・文化・自然とすべて含めて素晴らしい、だからこそ、大磯に住んでいる人たちは良い意味でプライドが高いと感じます。そういうことを子どもに伝わる町にしたい、と思っていますので、町長よろしくをお願いします。

中崎町長) 傍聴の方々には、熊澤教育長が話された本のことはまだお分かりになっていない方がいるかもしれませんが、明治150年という節目として、町の歴史を、町にゆかりのある方から寄稿いただき1つの本にするという計画があります。今後、情報が出ますのでお待ちください。

それから、教育について熊澤教育長からお話しいただきましたが、やはり地域の力というものが、子どもたちを育てるのに一番大事だと先生は話されました。私も先般、町田市にあります自由民権運動資料館というところに行ってきましたが、非常に立派な資料館でした。それは当時の自由民権運動の思想を言っているのではなく、本当に日本を良くしようとして、「大人がこんなにも苦勞していた」という思いの詰まった資料館であろうと思いました。大磯町におきましても、資料館などを利用して、子どもたちにこの町を本当に愛した人たちがたくさんいたということを学び、誇りを持ってほしいと思います。

町の潜在的な魅力をどのように教育の中に生かしていくか、まだまだ時間とたゆまぬ努力が必要ですが、子どもたちに良い意味でインプットしていくような、そういう町になれば、と熊澤教育長からお願いされましたが、私も思いは全く同じであり、それをどう具現化していくかがこれからの町の教育の行く末であろうと考えています。

では、協議事項の(2)「大磯町で『学び』・『育つ』子どもたちのために」を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

政策課長) それでは、「4. その他」に移らせていただきます。委員の皆さんから何かありますでしょうか。ないようでしたら、事務局から1点、ご連絡させていただきます。

政策係長) それでは、今後の予定をお知らせします。

第2回の会議は、来年の令和5年の2月の開催を予定しています。日程等につきましては、後日調整させていただきます。以上です。

政策課長) それでは、これもちまして令和4年度第1回大磯町総合教育会議を終了いたします。長時間にわたり、ご協力いただきまして誠にありがとうございました。

(以上)